



三養雜記

二

僧 5
120
2



門 1 節
號 120
卷 2



三養雜記卷二目錄

小歌
隆達節
武藏野盃
禍泉
對酌奇事
聲色
とろくたり
鳴ハ瀧北水
ねくさつ

大盡舞
壬生狂言
隱語北盃銘
孽水
酒席の遊戯
女藝者
ちりやたらり
あつちりやどんちりや
南方海島風俗

二 目録

天狗銅印

口碑小傳々和歌

ういまいとろ

つげ猫

七里つらと

麻姑手

般若假面

ひやー まふ

蚊帳

わくことと失ふ

よとやまの物語

窮冬

せいたろ島

初雪や犬北足踏梅の華

あふこ

四萬六千日

三養雜記卷二

小歌

榮華物語玉村まきの巻子川その柳風やけはとつと花

と根をたつよーといふ唄とあり後世のかけ節の唱

小や似たり松の葉に載す小歌の中は琉球組といふハ

永禄年中は琉球國より三線より一ころは組やゆゑ

子名つけたるもの少く小歌のよふまきものありこま

小次で鳥組腰組不祥組飛彈組忍組浮世組三線の

組なりこれ七曲を奉曲とす琴の組はり三線は組ふ

あつひて作りりのありむこれ小歌を集めたるもの

八松の葉續松の葉松の落葉松竹梅大麻紙鳶糸竹初心
集小歌想まきりふとくさくあり、そのくは曲節ハハハ
日々ん今も河東節のヤ地々長唄を舟の禿のくふやりや
とふ一節ふとハすてハ松の葉子又をえさう今うたふ節むり
の名ころりや

大盡舞

大盡舞といふ小歌ハ寶永正徳のところ幫間小名を得た
俳優の中村吉兵衛といふとれ作ありこの吉兵衛ハ小歌
の上手あるよ吉原つれ草おもえさう吉原のうま
小歌ハ今残りたふ僅ハこの大盡舞のこれいざれどあが

まぢうといひつゝて正奉おなまハ文句のつぎまこころえぬ
ともいと多うり、若くを南畝翁の原富源富、原武大夫として
三味線の名人ありより
つゝえたるといふ大盡舞の唱方蘇北座ちうハ又えさう今こころ
こハ定て異同あぐ、まて手ハ傳ハねど吉原ハやまき小
子、

道の布ろり此さりと柳風やあきかぜ子うれてどあう人なびこせも
やとれこのうさふびこよめ、

これハ新吉原ひけけころれあありま
うろろ山谷の草やうれと君うすまうと押ハバすや玉乃
基もたろろでこころよその見るあもいとよぬろあやま

おらるひやまか名のたりし

この洞房語園どうぼうごゑんにえんとう、おらる英一蝶作えいいつてつさくの小言せうごんふ、

まらちあつんで二冊にさふのりこむ今戸橋土手いまとせうしでの編笠あむがさうらこ

がらの夕ゆふぐれあひとありハあつぬむらじ細布ちほふ抄しやう

あつぬもききんしたぎうらふとをききよき

隆達節りゆうだつせつ

むら隆達りゆうだつといふ法師ほふしのこゝろ小言せうごんにそのころあまぬく

行ゆきちれて唄うたひつてを世よに隆達節りゆうだつせつといふ系竹けいさく初心集しんしんしゅうに

載のりすげ笠がさがうといふ人のあまこころあり

やうれ菅笠すげがさやんやあ緒おがきれていのおらるはさうらま

せびえいへんさやあさんせ摺すりもせず

とあり予よろろ隆達りゆうだつ自筆じひつの小言せうごん二冊にさふを藏くらり、それ奥書おくがきに

文禄三年九月日自菴隆達ぶんろくさんねんくわつひつじあんりゆうだつとありて華押はなおしあり元禄げんろくの書目しよめい

小隆達せうりゆうだつの小言せうごん二卷にまきとあまハ印本いんぽんふもゆりといえり、さう

そのころ隆達節りゆうだつせつのちり一証いっしやうハ恨之介うらみのすけといふ草子くさこ此書このしよのたしめ

夏なつ北きたより子この孟もうとて此この介すけひうされバあやめどのうら

びんがらん聲こゑして當世とうせいをちりるうらうたうふいとわらわ

てぎんたまひはとてえり、まらむらじ物語ものがたりに百五

六十年むそくねん以前いぜんをうたふとをり、隆達りゆうだつといふ遊民ゆうみんの

おら坊主ぼくしゆありうらを作つくりてその時のときのとき此この名なをす

みりきたるといふ聲のよき入子拍子のききたる坊主の諸人
おりろぐりこれとてうたぬ者はおしとあまるともそれより此
流行おひゆるふしの隆達が傳ハ堺鑑子高三隆達ハゆと
日蓮宗當津顯本寺の寺内子住す故ありて還俗ハ高
三氏此家子往て藥種と高ハ年をつく小歌此節を一流
謳ひたより世俗隆達節とて謳ひ賞翫すとあり又攝陽
羣談國華萬葉記より僧がとて入るとり

壬生狂言

京師此壬生の地藏堂あり毎年三月子念佛躍あり鰯口
と打て拍子をとるその拍子子ありて無言ありていふくの

所作あり、廿子壬生狂言とて、華洛細見圖子壬生も念
佛躍とて躍れ先子ありす猿の綱とてをすく、京師
の名所をあらしたる繪本子壬生此念佛躍子ハ大猿猿の綱と
たりを名がたり、蓑絨輪の句子賊たてて念佛子壬生も猿むら
りとも、その躍子称宜山伏紅葉狩餓鬼相撲座頭の川渡桶
取とてあり、ありその桶取の躍を小舟子作りて寛政のち
先京攝の間ありても、ちりたりとふそ此
さげぬる水もあらる、あろ月うげをうり、きうらる髪
あまひよりの常陸帯結びとめたきこらねをあらぬ姿の
をうの手ちぎらうおあせて古君のうらを汲うをけらう

くらしをくらむるをけしきよ、

おけごりの雑言



女
まんま

もん子
小をけの

あやぢぢ
ぬれう

右に載る桶取の圖ハ壬生狂言此繪本より一節を摹寫す、

武藏野盃 酒を戒むる隠語の盃銘

吾吟我集れ石田未得の狂歌、

盃の名小かぐれたる武藏野は富士とたぐへて蓬萊は臺

まゝ吉原伊勢物語もこゝに坐すも上戸ありとく大盃を出

さんとす男とびく、

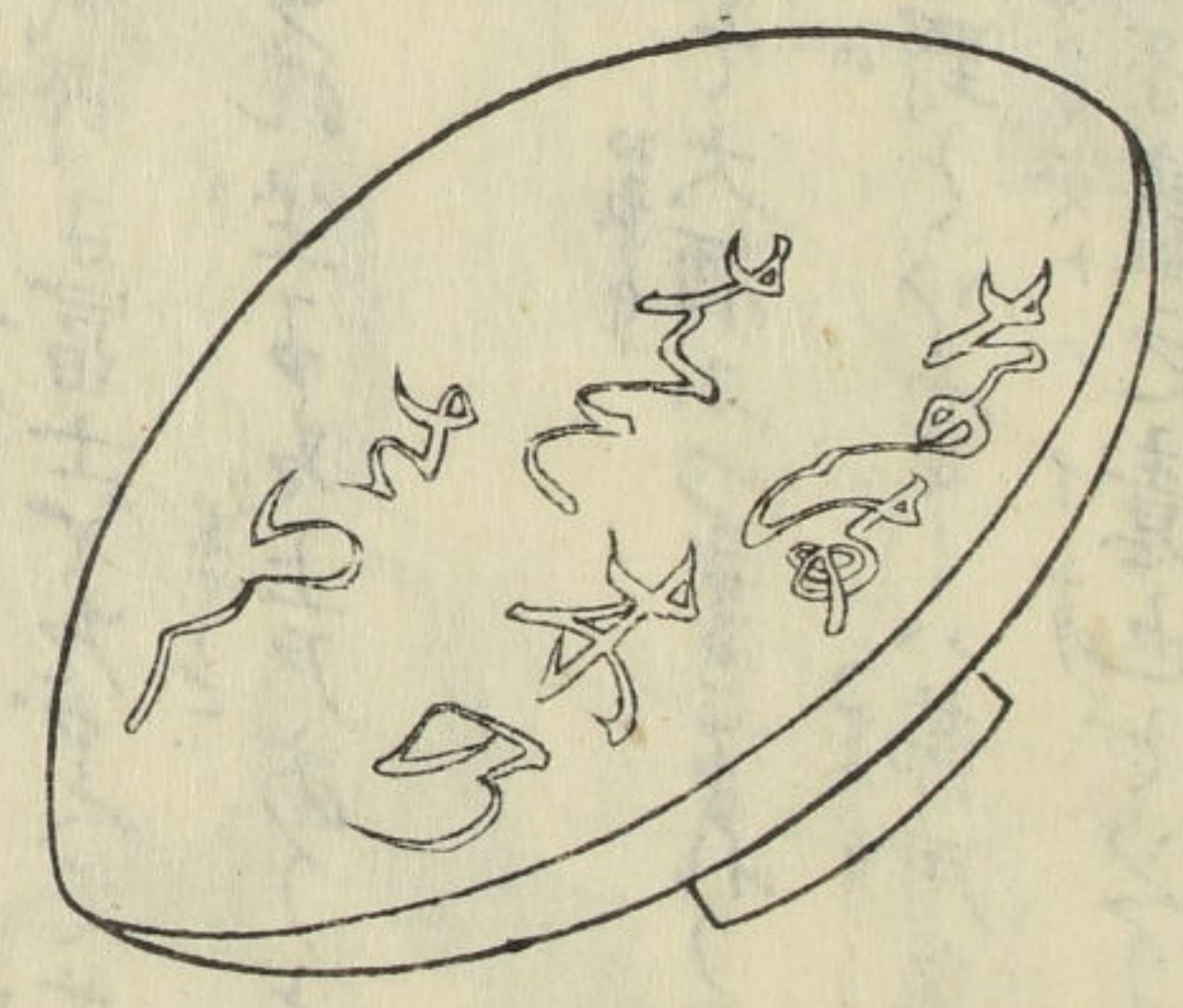
むぎ野を乃ふとふ出そ大酒ふつまもこゝにけりもこゝまゝ

こゝにえさる大盃をむさゝ野といふやハ節用集大全子酒盃

大者曰武藏野也言野見不盡之意也と云りそハ酒のむす

くて飲つるれぬを武藏野れさも廣々ハ野の見盡され

ぬといふ子やひひりあり又筑紫ゆる人のゆとよりありあり
 られざる盃此銘子、



ある盃子くこれ如く書つけたるありとハ謎のまんぼうの
 永禄天正のころとをそそ廿子りてそ年ルも酒をいましむる
 語もく工人此箱を造るふすこゆねを正しくつらうたると

も生木まてつる色バあひ口たふれありされハこの大盃ま
 飲ときハ心正き人あても口れたるをたびくあもれぞうと
 のいふめありしつひおとせり、

禍泉 薬水

古人酒をいましめて狂水と名づるをハ人の知るころま
 づ〜〜〜清異録子置之餅中酒也酌于盃注于
 腸善惡喜怒交矣禍福得失岐矣倘夫性昏志亂
 脹身狂平日不敢為者為之平日不容為者為之
 騰煙焰事墮穽機是豈聖人賢人乎一言蔽之曰禍
 泉而已とす、六諭行義日凡人未吃酒時就是

兇惡的人也還有些顧忌只那兩鍾藥水下肚就是
天不怕地不怕大呼小叶胡行亂作一切瀾禍行兇
的事都做將出來所以貪酒之人最易壞事ともしんえ
たりこの禍泉藥水の異名免つらうと云ふはあやう
酒は禍失あると佛家此戒行らうもさう然り尚書に酒
詰を載せて只子ことを戒しむされとあやう酒を飲
おがきと云ふあやうたが怠を酒ふるゆゑなるすやあやう
百禮是子なりまう千失も亦これよりおとまう只酒八酔へ
くして亂まらる樂登くく溺れまきまや

對酌奇事

天保二年のときや讚岐國高松の津高屋周藏といふの
あり生をえたる大酒なれも常は八人ありて肴をもちけ
對酌すれどもいざ飲まんとおりのとき八玄米子生鹽を肴
て飲むるともその數量はくくを肴とらうある時
周藏が檀那寺へ日蓮宗に僧來りていふやうに此ハ肥後
熊本の者あやうく傳へつけたまうしんこの地は津高
屋周藏といふ人玄米子生鹽を肴して大酒せらるの
よしき及了いふやうさやうふいり願はれ我らこれ周藏と
の子逢ひく酒を飲くらべ試たるといふまさいひその周藏
ハ日蓮寺の檀家おれがとやうきとありとてやがく周藏も

どういひやうに花はさうあつて來りてその僧に面會しむと
尋來らむ心底と悦びとをいひあつて、さういふやう
た空しく對酌す處に、あつておのころ酒後を催しあ
つめてとちり飲んて興あつて、さうとこれに凡そ五
十人あつてもあつても、それその人々六次の間にて酒肴
をまうけて、さういふに二人の上の間にて坐を、あつて玄米と生鹽
あつてあつて、さういふに二人あつても、さういふに二人あつても、
やめ、その升數を、さういふに壹斗四升八合と、さういふに二人あつても、
二三升を、さういふに、さういふに、さういふに、
嘔吐す苦しむもあつて、周藏と名の僧に、さういふに、

とちりもれく、とちり周藏が家居ハ一里を、さういふに、僧の旅宿
いそれより、さういふに、さういふに、さういふに、
子二人、さういふに、さういふに、さういふに、
さういふに、

燒酎の害

同じところ、さういふに、さういふに、さういふに、
酒を、さういふに、さういふに、さういふに、
嗜する、さういふに、さういふに、さういふに、
子ハ、さういふに、さういふに、さういふに、
とちり、さういふに、さういふに、さういふに、

て、まゝとふんぞり今五合をうまをんはつとふふのをけ
およろこびてその五合をあまの苦もなくまゝ五口を飲ぬ
あやめらうのふれさるはめをそのふつとさうあ
バ飲とさうがれはあの人より合て五合をあえられは忽
飲ををれまゝもあざ興して廿はくも人もあまのり
をといひのしるむと家あまのきをつけて奥より立出つそ
此うとそよも飲まいといふは猶あふ飲まんといふよりあ
又五合をあえらふまゝあつて礼を述べて飲り
て、これとめて十分を焼酎を飲たるともとあつてひつと
ぬ、さうが馬屋へ歸して常よりうたるともあつて煙草

吸子忽口より炎いつとをえながあつとさう身うちを
かりて卒倒したうとや、まゝ南八町屋にひとり住のものと
まゝ焼酎をすまて好うあつたぐれ多く飲てそれ
らち臥したうそのあれた目高くさう升をさうのまのこ起
もいでざればおとづもふとあつて戸をさう一ぐり
見子をうも冬のくおれば火爐に傍より臥し總身黒く
焦てをて居たりあつて煙筒煙草入るくさうあつて
ありふられも煙草を吸たりのあんとそひ焼酎ハ
燃性のりれたれば多く飲たらん後ハ煙草を吸とハ必し
つゝむふとふこを此話ハある官警のまればあつて

聞きしやありとぬ

酒席の遊戯

人情ハのりもろぬれあれど何ごとや流行をまき世のそ
らひまで酒宴の席も興をそつる戯も多う子拳をさつ
とのまご今も絶えん専行のそとめりなり拳ハ唐土おて
あもありて通鑑後漢の隱帝紀子足るなり手勢令まごハ
拇陣あつてつらさして身保のころハ相撲ハあそび人拳まご
さて手腕ハまごをけちりるあり遊女玉菊この技ハ巧
あつての玉菊が紋つきたる拳まごのそと近世奇跡考見
えさうさて拳まごの品あり蟲拳ハあそび拳まごハ

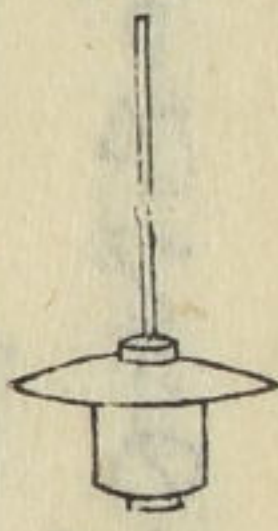
孤拳虎拳あご至つてハ拳の名ハこれかやおそ酒席
の戦子予幼年のころハ正直聖天さる獅子で中あり檢校
んやう座頭さんやをどつとを酔後のあそび子セも今ハ拳
より外ハ大くハすうとをまご又それよりむり子これを
ちとあつちとさうあつてとふん豆の戯あり今も歌舞妓狂言
の忠臣藏七段目ハ幕明子ハあつたりとまごむりのあごり
をるる豊芥藏本子安永の印本子能似畫とふ冊子あ
りその中子あれが夢ひつきの有があつとあり合のちあつち
よるとあれをふとつてあつていごぞんす圖ハ次とす
その圖をさくあり左子一二を載す

うー



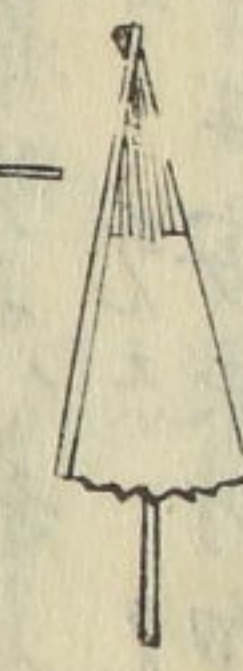
きりぎりす扇

あどや



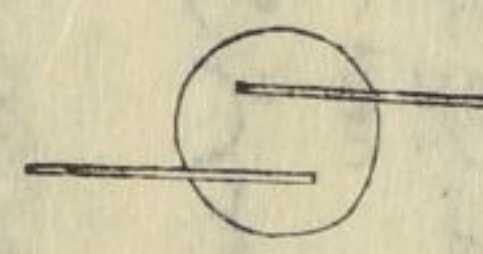
茶うん

かろき



扇

霞月



ちやん

このき



茶うん

たのむの戯もそのこれよりおひやま

声色つひ

俳優の語音をまぬふを声色をうらやまひひの技をあらま
 を声色つひをうらやまひひの今うらやまひひの雨のうらやまひひの
 うらやまひひのうらやまひひのうらやまひひのうらやまひひの
 請取たりやその次はこれも同じ役者まで市川海老藏でた
 のこます、そのうらやまひひのうらやまひひのうらやまひひの
 まつひ出五人とら七人とらつひをうらやまひひの留子短ちうひの
 ちうひのうらやまひひのうらやまひひのうらやまひひのうらやまひひの
 ありけれあどやひ出だして「うらやまひひのうらやまひひのうらやまひひの
 袖さぬへのおいとまでトあ、うらやまひひのうらやまひひのうらやまひひの
 うらやまひひのうらやまひひのうらやまひひのうらやまひひのうらやまひひの
 うらやまひひのうらやまひひのうらやまひひのうらやまひひのうらやまひひの

つるものゝやうにおひひううう十四年前より扇をうきだまつ
ふともれりたり砂まきをいふもあれ坐席にておひひれ
とく面をおひひうううとよれ

女藝者

吉原の女藝者うううれハ寶曆のころ扇屋の歌扇とふ
そのふとゞまれりその初ハ歌扇ひううかりうう後おひひ
外ハ娼家も茶屋もいて来て細見のやりての前ハとこ
ろハ藝者誰外ハも出ハやふとどろまきううこれよりうう後
小大黒屋秀民といふものらんもんをまきうう藝者をまきうう子
と肩書して見せも遊女と同じくあひ居て客をとりたる娼

家もありきそのやハ藝者とふれハきうう日あく遊女の中
少く三線をひき唄もうたひううとよて多くハ新造あり三線
のできる新造をあひよむといひて呼う弾せうとあり又せ
子ありあうとよもミか唄をうい三線をひきたるありこれむ
よりれさあもく中よりこれありううとよとせう今も
又せをうう時子ううきをひくハ三線番とて新造ハ役ありと
うう伊勢の古市越後の新瀉などハ今猶遊女の中少く唄も躍
もすことむうのうがかり歌舞の遊女の口さあを上
色のゆれハ高上よりまへ自ハ絃歌も美せ又ハ不得手ありと
ありうう後子ハせめとありううあもあうう一京攝も同ト

おのむこまて 一目千軒子 大夫天神らうらう三線ひらき 故牽
頭女郎を呼あり又藝子といへりの外子ありむらうハあり
子寶曆元末の年子といふとあり、また、濠標、二女
とよもとのハ揚屋茶屋へおられ座敷の興を催すためのれ
あり、琴三味線胡弓ハいふもさあありむらうハ女舞をどつと先
しものあり、享保年中より藝子、こころより出来たりとも
あまハ江戸よりハるう子と申、こころよりありて吉原までい
めもあるうん江戸おもをう子ハかきよりありたれど女藝
者ハ明和のころよりありときまう、それもとハかり袖を著
て今よりハひときハすぢれて品もよりより、さて女藝者

ハ古の白拍子れあうなるの如くおの人もあれど、ま
あ、あ、あ、遊女ありて、躍子れ一變せりのあり因云、
吉原までハむらうよ、二挺鼓子大鼓を兼ると女藝者の技
子今絶すさ、京大坂あても藝子の唄子大鼓をこの
囃子と入るとそわれど、その地中より座唄をうとふ者か
い、あ、上方唄のこあり、されハ江戸の如く下座、あ、下れ鳴
物子定、あ、手あり、の上方唄ハ、謠曲れ詞をそりた、あ
多うれハ、猿樂れ大鼓の手であり、ひおわえてその間を合
す、あ、その外大坂れ坂町島の内を、あ、諸國乃
舟つきの湊を、あ、豆藏のち命れ、あ、松島や、あ、川崎、あ、

そごうそふあふ小客も遊女もあつて拍子をとる大鼓を
うち今もとあつたりぬ吉原もともこのあつたりぬ
さうりさうりふ小唄も大鼓あつたりぬ金席上の子きやうか
らんためれもさうりぬやめれぬと鄙の手がうりあつたりぬ
里もはせてもあつたりぬ

さうりたり

猿樂の翁れうひもの詞うら明解や謡古抄増抄法
音抄拾葉抄等の諸注釋もすべて翁を載せず案するも
南留別志もさうりたりやうりうらうらうらうらうら
るる陀羅尼ぬりうらうらうらうらうらうらうらうらうら
るる樂れ譜あふ

都曇とつや亦非ありさうりたりハ都曇答臘の字音乃
轉訛也あり吳萊題が羯鼓録も大聲嘈々忽放肆都曇
答臘矧敢前と見え都曇答臘ハ鼓の名あり隋書音
樂志龜茲此條も都曇鼓答臘鼓あり白氏六帖も都曇
答臘本外蕃樂都曇似腰鼓而小答臘即蜡鼓也とい
ふ了瑜伽論の十種聲此中ハ都曇等鼓俱行聲ともあ
る

ちうやたり

ちうやたりハ笛れ譜あり體源抄青海波此條も聲歌
太良利知良利ハ良太利良利打夕取とあり源

氏物語子、たけぢちちりくとうとをどりまへしを年うら子ひ
またるゝふかどもつらうおくわめきさうりとあを細流抄子、
笛の音を志やう子すあう、たけぢちりくたう唱歌あり
とさう、後拾遺和歌集のうたふ、

笛の音れ春地りろくきこゆら華ちりたうと吹ハあり
ううともあう、近きものあう、貞徳が油槽ももろそつちく
とふとこそ忍れといふ句子、さううあう梅ちりたうと笛の曲と附
たうもあう、證てすべし、

鳴ハ瀧の水

あふ瀧の水とらハ古りのを祝とまつる年詞とをま

ア、拾葉抄子ハ當世酒宴ハ三國一トやといふが如くむうハ
酒宴子あふ瀧の水をまひひありとさう、平家物語の額
打論ハ二人とて走いて延暦寺れ額をまきておろさん、ま
らち破れしや水あふ瀧の水日ハてるともたえずとさうた
てとちつ南都の衆徒れ中つそ入子、まるとあり、こめをや
詞源平盛衰記義經記おとまをえさう、日ハてるともたえ
たうたうといふ、あたうとさう、水のをまるとあうとさう、同
詞あり、陸士衡が歎逝賦子水溜々而日度註ハ溜々水流貌
とあり、

あがまをやとんとやひろさうやとんとや

あがまたやどんや、ひろせめやどんや、催馬樂の詞あり、
寶方朝臣家集子あり女子ややうたううとふあがまきを
むらびくたせられハ

ひろせうさうとまろと藤ねせよそれあがまきふあうあ
らせんつあも催馬樂のこととそとそとああり、

おろさう

おろさうのわらさへハ于思の于子發聲のおやそくんさ
あり、運歩色葉集子于思翁、申樂三番奏之詞也とありト養
狂歌集子あり人のゆくへ正月七日子行はるハ七こされうあ
とつふあがまきとつてひて、

于思翁
とつふあがまきとつてひて、

こつても證とすや、さてあの子思とつて老人の鬚多きを
形容したる詞にて春秋左氏傳子出る宣公二年傳子宋城
華元為植巡功城者謳曰睥其目儲其腹棄甲而復
于思于思棄甲復來註子于思多鬚之貌又思如字
とつてさうこれハ子の翁此鬚の多きハ老人の壽瑞相あり
と祝したる如り猶らの翁此謠曲此詞子あまうをとめ此羽
衣ハ佛說樓炭經の石劫のころハ三穗の羽衣此故事とあり合
たりとつて萬歳樂ハ平調曲の樂名あり天下泰平國土安
穩とつて八字連續あり熟字ハ華嚴經子ありとつて今經文

を檢すりしありしより千秋萬歳の語ハ家語韓非子より
子見えて本文を鈔出するまでなればいふかた公羽の
舞此本説ハ詳ありしと佳吉の御神を表し作れしものやと
も伊予のあれどあやぶらば今こそいふ遠碧軒隨
筆世事談綺をいふもいさゝか説あり

南方海島の風俗

あゝ人のを子一は伊豆七島のうち三宅島をよめてハ村より二
三軒づつありて造作もあつて住むるありありそ
此家を地のゆれハ烈とありその村に女の經水子ありし
ゆのハいふかたが家子ハ痛くしとありとて夜に子宿

とやされハ經水子ありしとてこれハとたおとより朝
より起いでてころ家へ行縁さきふく朝飯を食ひひも夕
げも同じとあり山島のうやをいふと常よりありとあり
その日子得たものハつら家此庭子抛入夜子入ルハ又りと
いふとて宿あり、まゝ寐宿とてまゝありたる家ハかく村中
あてころき男どもれ多く入て家子年ころ十五六歳あり娘
をりてころものハつら家子ハ寐宿をすしとての寐宿子つら寐
まゝありしとていづも同じ人情もくうち氣ある娘をいふ
寐宿子行てそをいふとハその親ごものいふやういふともあり
あまき者もその年ころありとありとありとありとありとあり

あつた借とさえいもそれとて足れりといひま
 借ものすづつといふは天狗謝とてうぬれより後
 和尚の手つと多くあまうてのひびさればあうの今和
 尚と手短の祥貞とあさうてよびうとや三十日たう
 すて天狗再来てさう頂借やうたう手と返しやう
 つひ火防の銅印一枚を贈て歸とてそれ後和尚の手
 りとの如く子のびたりとさう祥貞和尚の書も亦火防子
 あうよりさうとれ一條ハ外岡北海の地子遊歴れをうう
 きうたうとて話あり且火防の銅印
 の押たもそれさう贈られさう



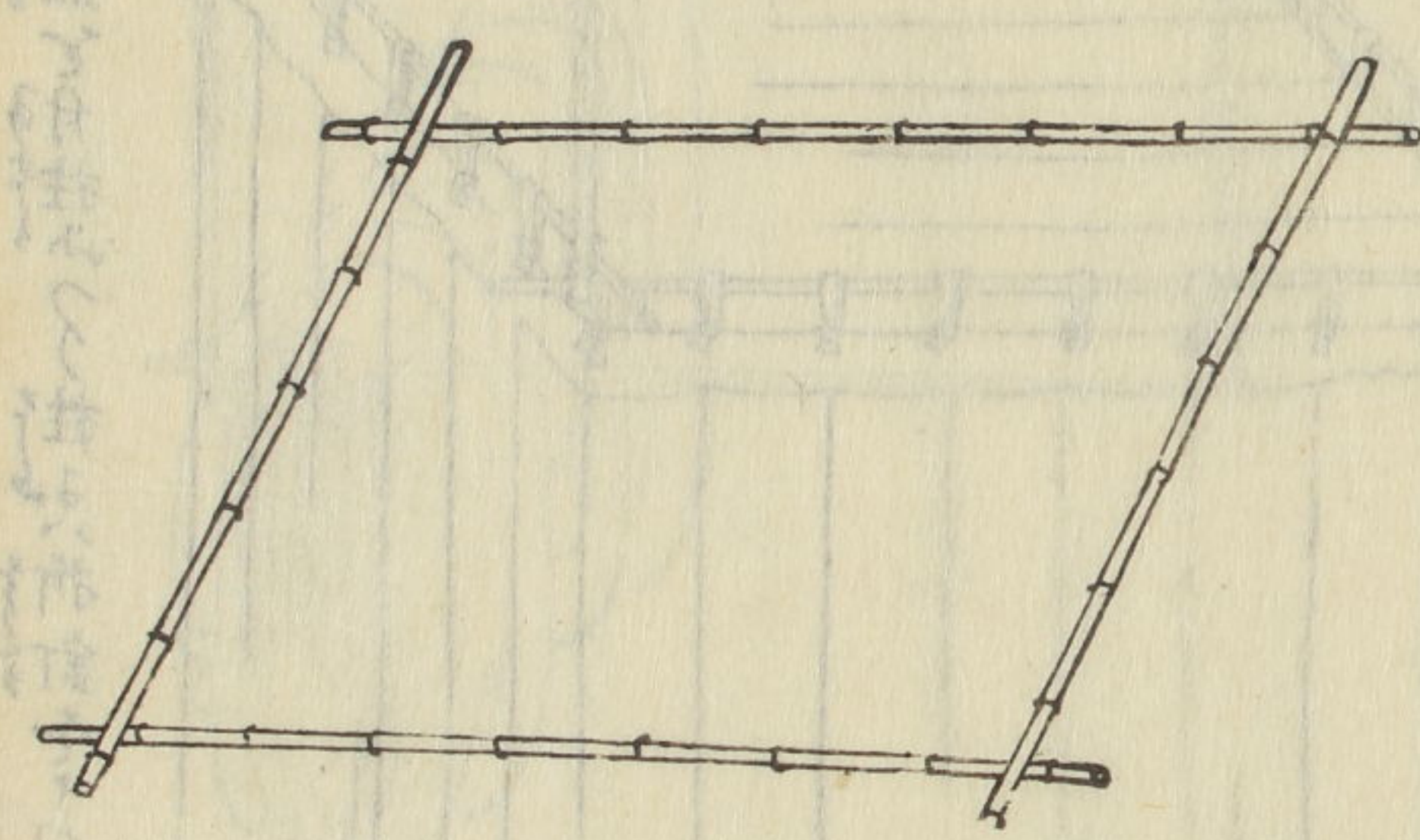
蚊帳

蚊帳とのふりの今ハ家毎子あをさうおをぬ物なれと古書大
 蚊や火をこそ和歌あもあ蚊屋の名ハさううハ太神宮儀
 帳延喜式子えさうりまて春日驗記画詞小白き蚊帳をうけ
 たうとてあうり近くハ吉田鈴鹿家記寶徳元年四月九
 日花園殿より蚊帳参るとあるハ抄の字室町家の頃よ
 りハ今の如く夏月ハあう蚊帳をさうとてえたりか
 ね方紐あうつとてさうて掉さうとてそのの禮家此
 記録子えさうそれハ日毎子さうたうあう吉日と
 えさうつとて又吉日とさうとあり今も邊鄙ハ

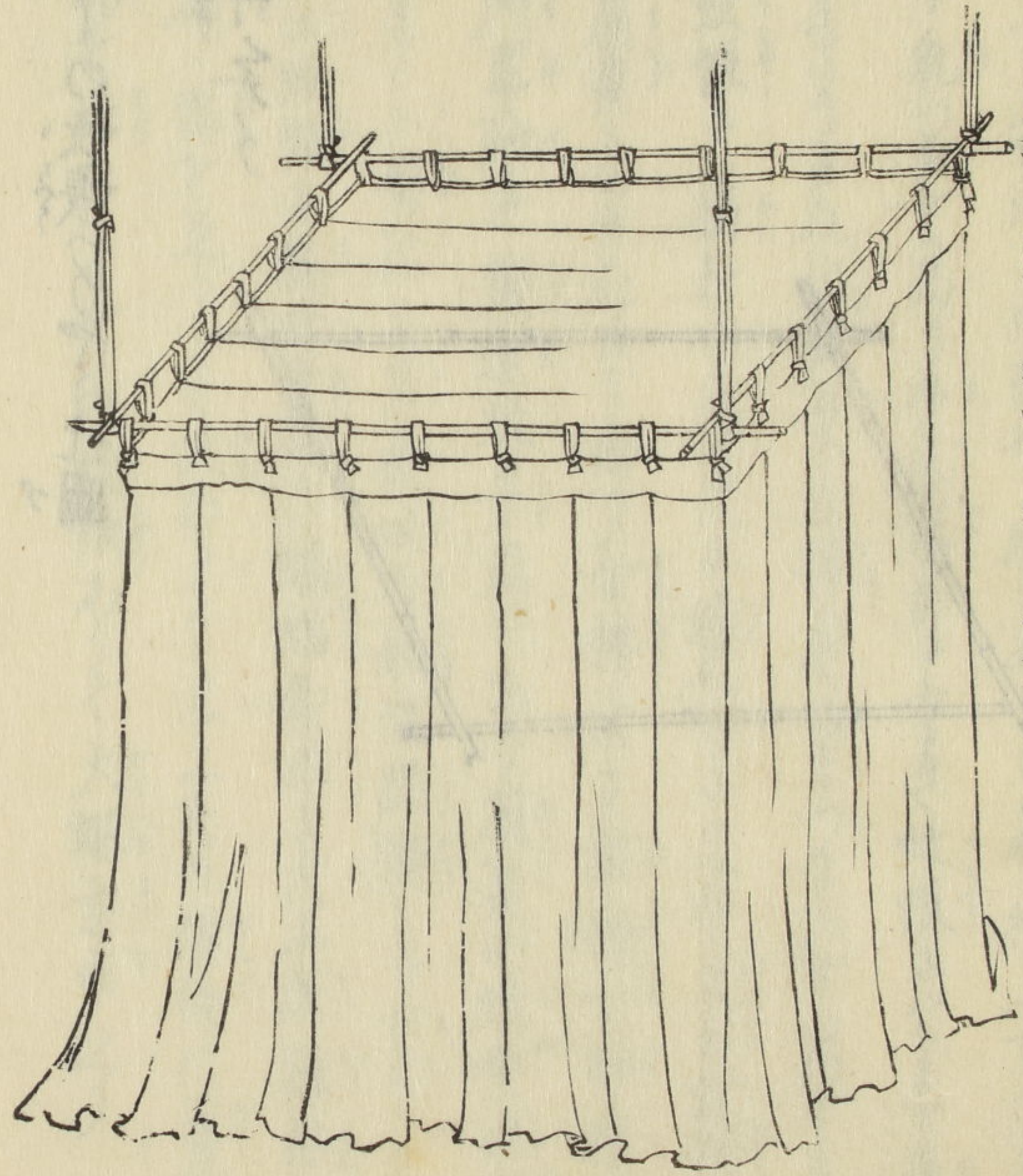
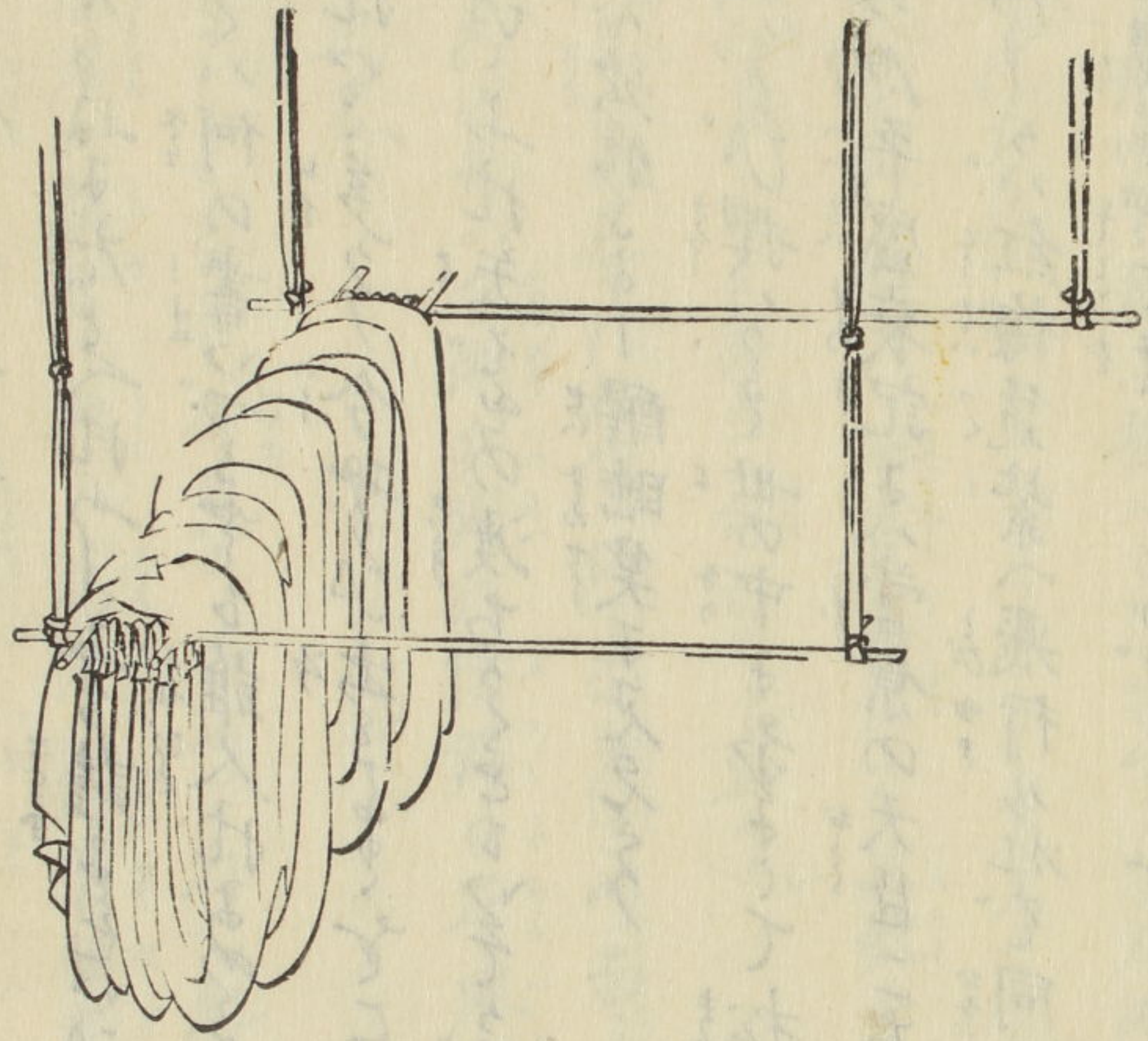
掉さねみくつるあわしれ存ぞこねる地こまろもあると名な掉さねふてつまハ
 布のと子ち乳ちつきてあり予よの家いえあつたき蚊くちや帳ちやうハ子こ布のと
 小ち乳ちつきてありされハ江戸えはあつた掉さねそのつりつり絶たえ
 たれと蚊帳くちやハ猶なほむしりのあつた造つくれりとい兄まいたつ仲ちやう又また云い蚊帳ちやうの
 漆色しやくしきハ崩おこ黄き子こうきれるとあり金樓きんろう子こ子こ齊せい桓げん公こう卧ふ於お拍ぱく
 寝ね云い開ひら翠すい紗さ之の幃つゑ進しん蚊ぶ子こ馬ばとあり崩おこ黄きの蚊屋くちやハ證あや
 すぐまゝ入い蜀しやく記き子こ是こ夜よ蚊ぶ多た始はじめ復また設たて幃つゑといふともいへ
 たろ又また云い蚊帳ちやう子こ馬ばを畫えきハ蝙蝠こうぼうあつたとい説い挂か林りん漫まん
 録ろく子こあれど馬ばと名なつくと故ゆゑあつたといえたり備びん後ごハ舊きう家か子こ
 蓋あし子こ馬ばを漆しやくたると名なの蚊帳ちやうありと大塚おほつら宗甫そうふとす

むしりの蚊帳つりやうの圖

竹たけくさし



三



この掉子紐を付柱につる柱に折釘をさす

口碑子傳々和歌

世の人々ぬきたとこれやしも誇りといひしる和歌あり花
ど多く何の書つづるやも誰人れよめるといふとのをこれぞ
るれいと多う今世のひ出るまをこそよしと

かひふれ矢をの渡ちうくとそふまのきせきの長橋
宗長の歌ゆるし醒睡笑子見えう

梅とひ櫻はうも世の中子あまて松はつれきゆるらん
こみよ源平盛衰記子菅原の大臣こちふらとて
たまひうら紅梅筑紫へ飛行ルれを同御所子あひてあ
りら櫻は御言葉子くらさうとてとて一夜の中子粘

子々を源順の歌ふ梅とひささうはれぬ菅原やうくそた
のむ神れちうひととよきうりええうこのあまよりて作
まうけしやあらん奉居宣長を此歌を順といふも奉未子
あをんやうつてあきあうとやう

ちうきよのをこれけうりのまを免せめあとのりあ秘れあよ
知る子あのをい全漸兵制此附録日本風土記子見えて琴譜
れうととて

かるとときさこそ命のううあうめてれき身と思あうらハ
大田道灌の辭世れ歌と萬里が梅華無盡藏及び武者物語
ふもい世もさやうて誤あり慕景集子よらに道灌が子

の討死ある時よある歌あり、

目ハやすく耳ハせまふきを、落てうらふ雪のつり、年々

渚松和歌集あり、

下野の室礼やまふまふたが、ろよつかりやらん

慈元抄子見えり、

やよの夜ふあめ鳥此聲まけ、まきぬさきの父ぞ戀き

東山義政公の詠あり、長頭丸隨筆子見えり、生下未名

といふ冊子ハ母をこひ、きき作り、

そのハ父をあつ、のひと柱を、ハ雉も、これまきと

續狂言記禁野の條子見、安居院聖覺、神道集もとあり、

雪をれて後のひくと、やあふよとより、空ふあり、明此月

あのをとせ、傳ア弘法大師の歌といひ、あハ室鳩巢の大學

此明德を詠、あともいど、あやまり、佛國禪師の歌あり、集

子見えり、三國傳記子鞍馬寺多門天の御歌、此より、あとい

り、

の半、ゆとこそ失人

金銀米穀を借て年月、その利息を取たつと、古より公私

子あつとあり、是を息といふハ、蕃息の意あり、ふえまさること

あり、人れ子と子息といふも、ふえり、まていふあり、されハ今

關東の田舎あり、利息をやぐり子といふハ、その意たがらん、

おれたち子たといふ、慈恩傳子外道の事とを龍を侵す猫の如くといふ事とも見えたり、

窮冬

今年あけて去年の冬と舊冬といふ、吾妻鏡治承五年正月十一日の條に窮冬とあり、舊冬と書んばあけつゝなと窮冬といふ事とも見えたり、

七里のつた

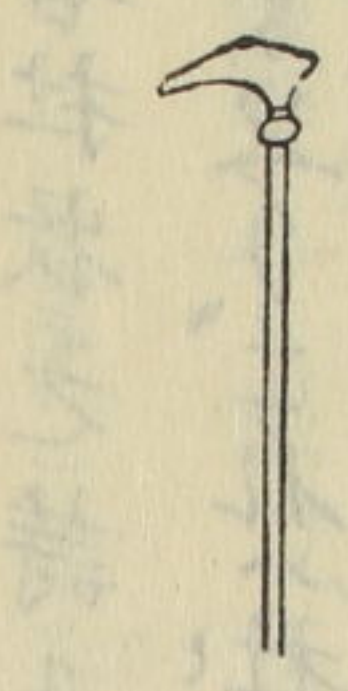
佛説安宅神呪經に七里結界といふ事あり、弘法大師の行狀記に高野の山此と云て悪神等へ云か我結界七里の外に出去まゝ結界七里の間地主山王ちちひて守護したまふ

とあり、俗にいまさらふとのあれは七里のつたをよせつけぬをいふ、この七里結界といふ事の轉訛を詞あが、

せいとう島

いづれにても世話をやきて身力を勞すことをせむら島といふ、たゞかゝるいふ諺あり、故事因縁集に神國に生るる人が現世の神明をすく、未來に佛を信仰する、六才太郎島へ走り過るといふ事あり、これハ諺のせいとう島ハ才太郎島の轉訛に似たりといふも、松の葉に載る三勝心中といふ小歌此詞にいふや、取期を急うといふて大屋の東にさし、煙露が若くはれ、身と若くは雨といふ文句あるとあり、大

泉和尚の藏ありしといふ唐畫の十八羅漢の畫賛の帖あり
 且これ中麻姑手をとりて像ありその製鳥爪の如しこれ
 ふよりく年ごろれ疑ひのけたりき又云賛の詞子木童子と
 あるハ麻姑手の一名と云えり竹婦人此的對といふア
 唐畫麻姑手の圖



如意ハ痒を搔き心のあはれくこれハ如意
 と名々より釋氏要覽ふえりくこれハ如
 意と麻姑手とハ一物異名あり

第五 諾矩羅尊者の贊

善心爲男其室法喜背痒孰爬有木童子高下通
 當輕重得宜使真童子能知茲乎

初雪や犬の足あり梅は華

骨董集子初雪や犬の足跡梅の華と云句の正とひて五元集

小雞去書二竹葉これハ五山派の僧此聯句子犬走生梅華

といふ對ありと云予らく聖瓊集をよめり古有絶對

云雪鋪满地雞大踏成竹葉梅華といふとありあれ犬

のあり何と梅のオホの證とナゲル

般若の假面

世子鬼女の假面を般若といふ昔ある女房の妬少きをい
 ましめんとして般若坊といふ僧のうちありと云やその假面
 今子傳ふといふ

刀劔の具たがえもま泉いづみの名なもあこといふあり、今いまハ七子しとかなり、
 巾きんハ金具ぐ子こ細さい點てんをつきこまりど、泉いづみの織目めもく具ぐ乃の
 細さい點てん子こ似にればあらずてあらいようあり、其その紋もんハ魚胎たい子こ似にくらを
 りて名なづけたるもるならず、魚いを古語こ子こナトハ魚子この義子ぎ
 子こナトハ音便べん子こ古こ言げん子この例少すくくらと、装ま劔けん奇き
 賞しょう子こナトハ音便べん子こ古こ言げん子この例少すくくらと、装ま劔けん奇き
 賞しょう子こナトハ音便べん子こ古こ言げん子この例少すくくらと、装ま劔けん奇き
 ハウヲトシテ食じ料りょう子こあつとき子こナトハ音便べん子こ古こ言げん子この例少すくくらと、装ま劔けん奇き
 此この物ものをしりてハ名をよび用子こあらりてこのへのうられると、やいふも、
 水みづを常子こハミツとあらひ食料りょう子こハモヒとあらり主水すいをセドとよ

むハモヒトリの約ひまハり、錢ぜにも體ハセニとあらひ用子こあらりてアレ、
 ともハ料りょう足たり比ひ義ぎあり、

ひやう

吉原きちげんへ見物けんぶつのま子こ行いくを素見すけんといひ俗子こハひやうとあらり、
 是こハひやうとあらり、山さん谷や子こハすきくらの紙かみを製すり者もの多おほく住す、
 その紙かみ漉すりの方かた言げん子こ紙かみ比ひたねを水子こづけおきそのひ
 やくらのあらり行て廓の子きこを見物けんぶつといひ俗子こハひやうとあらり、
 詞ことばあらり今ハそのといひ俗子こハひやうとあらり、松まつ澤ざい老らう泉せん
 のとあらり、ゆきまるく遠國えんごくも俗子こ茄か子この枯と舞といふ
 加賀かがの邊邑へん子こ舞まをするもの多く、その地茄か子こを産す、茄か

子のあき年ハ舞者四方よりて鐵穀を求む故子加子の
 枯をもやて舞とてと兼徳録子とる俗語此轉訛
 大おねこと類多し

四萬六千日

七月十日を觀世音の四萬六千日と稱して淺州寺を二日前
 日より參詣のり此羣集をせり、わと月毎子一日の功德日あ
 りて觀音欲日とて

- 正月朔日 向百日 二月晦日 向九十日
- 三月四日 向百日 四月十八日 向百日
- 五月十八日 向四百日 六月十八日 向四百日

- 七月十日 向四萬六千日 八月廿四日 向四百日
- 九月二十日 向四千日 十月十九日 向四百日
- 十一月七日 向六千日 十二月十九日 向四千日

江戸庶子子とる、この中七月十日ハ四萬六千日と向とい
 少不よりて此日子とて人々とさしあうづとと見る
 且、むらハ淺州寺の境内にてこの日茶せんをわきあふの多
 いで、多ハ田舎のちれりてとてくねとてとや、寛
 政のころよりたえとて、揚枝んせ下袋とて附子
 の粉此袋を赤紙とて、軒とふさぐとあり、今ハ雷上
 文政此とて、小見とて、二軒ありてハ見及ぶりき、今ハ雷上

